教育と文化

鍋島焼調査研究発表会
江戸時代に佐賀藩が特別誂えした鍋島焼の特質

●問合先　生涯学習課文化財係（☎㉒1262）

市教育委員会では、『国史跡大川内鍋島窯跡（大川内山）』の整備を進めるため、平成26年度から令和元年度まで、史跡地内にある日峯社下窯跡の発掘調査を行いました。

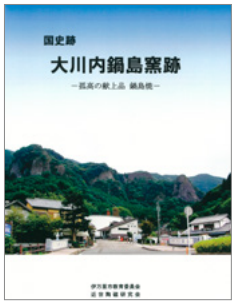
2月12・13日、市民図書館で、発掘調査によって明らかになった窯跡の構造や出土した遺物の新たな知見などを発表しました。また、鍋島焼の始まりや変遷、国内の出土例などの研究発表を通じて『鍋島焼の特質』を明らかにしました。

鍋島焼は、江戸時代に佐賀藩が将軍家への献上や幕府の要人への贈答用として特別あつらえした磁器製品で、日峯社下窯跡では、初期の鍋島焼を焼成していました。

↑調査研究発表会では、出土した鍋島焼の破片などを説明

調査の結果、日峯社下の窯は『階段状連房式登窯』であることを確認しました。全長（水平距離）は約52メートル、焼成室数は15室と推定され、操業年代は1650年代後半～1670年代と考えられます。窯跡の物原（失敗製品を廃棄する場所）の下層から鍋島焼が出土しており、操業当初から献上品である鍋島焼を作ることが意図されていたと考えられます。

市教育委員会は発表会にあわせ、6年間の調査成果の報告として窯の構造や出土物の特徴などをまとめ、12ページの小冊子を作成しました。この冊子は市歴史民俗資料館で配付しています。また、市歴史民俗資料館では、4月10日（日）まで、発掘調査で出土した鍋島焼の破片などを展示・紹介しています。



↑調査の成果をまとめた小冊子

郷土の文化財

伊万里の遺構シリーズ～埋葬遺構を中心として～最終回

埋葬遺構から何がわかるのか

●問合先　生涯学習課文化財係（☎㉒1262）

市内の埋葬遺構について、16回にわたり紹介してきました。シリーズの最後に、埋葬や墓から何がわかるのかを説明します。

旧石器時代から、死者を弔うため埋葬が行われてきました。縄文時代の代表的な方法には、手足を強く折り曲げた状態で埋葬する屈葬などがあります。この時代の墓には差がないことから、採集生活が中心で、貧富の差や階層がなかったと考えられています。

弥生時代の埋葬には、板石を囲って作る石棺や甕に埋葬する甕棺などが使われました。石棺や甕棺自体に差は見られませんが、有力者の墓には鏡（青銅製）や玉類、武器などの副葬品が埋葬されています。農耕が始まり、集団で農作業をする中でリーダーが生まれ、さらに米を蓄えるようになったことで、階層や貧富の差が生じたと考えられています。

古墳時代になると、土を盛り上げ、石で覆うなどの巨大な墳丘を持つ古墳に変化します。全国に影響力を持つ政権の影響を受けて、前方後円墳のような全国的に統一された墓へと変化したことがわかります。

このように、墓を調べることで原始古代の社会がどのように変化したのかを知ることができます。

最近はコロナ禍の影響などもあり、家族葬が増えているようです。これも社会変化の表れと捉えることができます。今後、社会が少しでも良い方に変化することを願わずにはいられません。